

# 田村・スマラグディナ の憂鬱

ガチャピン三世

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

昔書いて寝かせてたものを供養がてら投稿したもの。

# 目次

田村・スマラグデイナの憂鬱 | 1

多治見警部補の事件簿 | 16



## 田村・スマラグデイナの憂鬱

濃密な光化学スモッグに覆われる街であっても、薄ぼんやりとした太陽が昇り、ガスの吹き溜まりの中から高層ビルが林立する都市に朝の訪れを知らせてくる。

田村はその日、普段よりも一時間早い午前5時に目を覚ました。30歳がもう目の前にまで迫ってきている体は、脳が覚醒したとしてもすぐにはエンジンがかからない。指で目尻のやにを払い、まだ寝かせると抵抗するまぶたを重々しく開け、年単位でクリーニングに出していない、汚れの染みこんだケツトをのそりとかき分けてようやくと半身を起こした。

枕元で充電していたデータ端末を起動させると、着信はなく、深夜に届いたメッセージが一通。メールソフトを起動してみれば、送り主は『モモンガ鈴木』と表示されていた。

かつては受信ボックスを埋めるほどに頻繁に連絡を取り合った仲だが、5年前の転属をきっかけに疎遠となつてしまった、懐かしい名前だ。

田村はふと、お人好しで、仲間内の和を大切にしていた骸骨のアドバイザーと、その向こうで笑う痩せ気味の男の顔を思い浮かべた。メッセージの内容は、ひと月前のものと同様、最後の日くらいは会えないか、いつもの場所で待っている、というものだった。

要約すれば二言で終わる文面ではあるが、10行に及ぶメッセージは田村個人にあてた言葉がいくつも見え、これを40人の仲間それぞれへ一通ずつ書き上げたのか、と、田村は頬を引きつらせた。

ゆつくりと、噛むように、メッセージを読み終えると、端末を裏に伏せてベッドへ置いた。裸足のままで少し冷たい床を踏む。ぐつと両手を突き上げて伸びをして、いつからか悲鳴を上げ始めている腰がびきりと痛んだ。

くすんだシンクで泥水のような合成コーヒートを淹れる。製造会社のロゴが誇らしげに印刷された瓶から2センチ角ほどのキューブをカップに落とし、湯を注げば出来上がりだ。

オーガニック・コーヒーの持つ風味や香りには目もくれず、苦味と酸味、それからカフェインを適当にぶちこんで、何を考えているのか灰色になるよう調整された合成コーヒーであるが、むしろ近年の田村はこれを好んでいた。

かつては100年前に刊行された資料本をかき集めるほどコーヒーという飲み物に興味を持っていたが、数年前、念願かなって本物のオーガニック・コーヒーといわれるものを味わって以来、すっかり熱が冷めてしまい資料本も処分してしまった。目玉が飛び出るような値段だった割になんの味も香りも感じられず、湯気を立てる黒い液体を一息に流し込んで、ひりつく喉を抱えて逃げるように店を出たことを、今でもはつきり覚えてる。

田村の朝はいつもスクロース・タブレットと粉末ミルクを多めに入れたコーヒー一杯だが、今日この日だけは、コーヒーを少しだけ多めに作り、誰もいない自分の向かいへ、来客用のマグカップを置いた。

ふらふらと揺らめく湯気の先に、リアルでは数回会ったことがあるだけの、しかし濃密な時間を共に駆け抜けた友人の姿を思い浮かべながら、田村は目を閉じて謝罪する。

「でも、それはできないんだ。ごめん、モモンガさん」

もう一度端末を手に取り、メッセージを最初から読み返す。モモンガからのメッセージは、

「新しいお仕事、最後まで教えてくれなかったけど、ユグドラシルの運営チームなんですよね。一つのギルドに肩入れできないのもわかります。それでも、私はもう一度、タブラさんと、そして皆とナザリックで会いたいです、わがままを言いますが、どうかよ

ろしく願います」

と、いかにも彼らしい、しかしどこかイメージにそぐわないような印象を受ける文面で締められていた。

田村は粘り気すら感じるコーヒを一気に喉へ流し込み、端末をスリープモードに落として、ぎゅつと唇を結んで立ち上がった。昨日のうちにクリーニング用の薬剤を吹き付けてある、病的な白さが目に痛いシャツを羽織る。

社会人とやらになって十数年、なんの意味があるのか未だにわからないが、自分の首を締め付けるためだけの細長い布切れを手にとった。まるで首輪だが、これで気持ち切り替わる。今日の始業時間は早い。

\*\*\*

出勤の時間が変われば、人も広告も顔ぶれが変わる。

普段よりも少しゆとりのある地下鉄で、田村はぼうつと車内吊り広告を眺めた。

かたん、かたん、車内の揺れに合わせて、広告のイラストも踊る。目がちかちかするような忙しない映像とともに、耳に残るよう計算された音楽と文句が脳を揺さぶった。下層市民は、屋外でのデータ送受信端末の操作が固く禁じられていて、こうして短くない通勤に費やす時間のほとんどは、広告を眺めるくらいしかすることがない。田村の隣に座る年かさのサラリーマンは、口と目を半開きにして、何を見ているのか。



脳みそのしわにからみついてくるかのように繰り返される広告のフレーズを、となし口の中で遊ばせているうちに、地下鉄の揺れが止まる。「ネオサワメ、ネオサワメ」。一斉に流れだす足音に、田村もその身を委ねた。

ネオサワメ駅を出れば、もう田村の勤める会社は目と鼻の先だ。建物も道も毒々しい化学物質が染み込んでいるのが当たり前な下層市街において、誇らしげに社名と、その由来となった大樹を模したロゴが刻まれた銀色のプレートだけが不釣り合いに輝いていた。

三度のエア・シャワーを通り抜け、社屋内に入った田村は視線を上を持ち上げる。飾り気のない社内であるが、エントランスにだけは透明な建材が使われており、明るい上層を優雅に歩く役員達の姿が見えるのだ。会社は社員の向上心を刺激するため、などと説明しているが、垂直に30メートルも離れた階層で、手触りのいい透明な壁は指をかける窪みの一つも見当たらなかった。

田村は数度頭を振り、どうでもいい考えを振り払う。

彼の首から下がる社員証は、出勤から退勤まで、秒単位で彼の動向を追っている。社内ですべてをしない時間、ぶんだけ給金が引かれていく。早く自分の端末の前に座らなければならない。

\*  
\*

ゲームマスターの権限が付与されたVRヘルメットの中に映し出される『ユグドラシル』の世界は、かつて一般プレイヤーとして馴染んだものとは程遠く、各プレイヤーのログイン状況やバイタルデータで埋め尽くされていた。人間の持つたった二つの眼球でこれら全てを処理することは不可能であるため、田村の頭を覆う特別製のヘルメットは、神経接続を通して直接脳にデータを送り込んでくる。

VR機器を用いたオンラインゲームは、この管理システムを導入することでユーザーの安全性を高め一世を風靡したが、反面、脳に過剰な負担を強いられる運営チームは、長くて三年で体を壊すと言われるようになった。そんななかで五年間もの長期間を勤め上げている田村は、もはや他のスタッフからの尊敬を一身に集める最古参といえた。

並行して九つのサーバーの稼働概況を監視しながら、田村は特異なバイタルを示すプレイヤーを強制シャットダウンする。長年遊んだゲームの最終日にこんなことをするのは心苦しいが、血糖値をはじめとする数値が軒並み衰弱状態を示しているのは、どのみちサーバーダウンの時間まで持つまい。何日徹夜したかは知らないが、顔も知らぬプレイヤーの『ユグドラシル』生活はここに終わりを告げたのだ。

田村は、膨大なデータを脳内で処理しながら、つとめて自分の、生の視界に意識を向ける。ヘルメットの中は全くと言っていいほど光が入って来ず、何も感じない。感じる余裕もない。

ほとんど無意識のうちに、今の政治体制に批判的な発言をしたユーザーのアカウントを凍結し、数年分の会話ログを遡って作成、公安組織に通報する準備を整えた。そんな自分を、田村は真つ暗な視界の中で、どこか他人のように思っていた。

午後11時を回るころ、田村を断続的な頭痛が襲うようになった。

サーバーに意識を向けると、アールヴ Heim でワールドアイテムの大盤振る舞いが行われたらしく、送受信するデータの量が二桁ほど増えていた。左手でアームを操作し、会社が用意している栄養ドリンクを喉に流し込む。脳の痛みが一気に消えるが、それがどのような薬効成分によるものか、田村は深く考えないようにしていた。どうせ『安物』だ。

それから一時間もしないうちに、事は起きた。

最後の一分間、全ワールドへカウントダウンを告げる田村に、部下からの急報が届く。ヘル Heim のデータを担当する社員が、突如鼻血を噴き出して倒れたというものだ。脳内にデータを走らせる以上、急激に送受信データが増大すれば脳がやられる。恐らくはそれだろう。

田村は一瞬悩んだが、医者を手配することも、代理の管理者を立てることもしなかった。どうせあと三十秒もない。その間くらい、放っておいても問題はないだろう。データの処理を最小限に絞り、カウントダウンに意識を戻す。

3、2、1。田村は『ユグドラシル』の全サーバーを停止させる瞬間、不思議な幻を見た。

\*  
\*

巨大な、天を衝くような茶色い塔があった。

その上部は不気味なほど深い青色の空へ溶け込み、先端は霞んで見えない。

ばらばらと、空から破片が散ってくる。嗅ぎ慣れた、すえたような臭いから、この塔が腐りはじめているのだとすぐにわかった。

大きな塊が、不思議なほどゆっくり降ってくる。つやのある緑色をしていたそれも、ゆらりゆらりと揺れるうち、ぐすぐすと端から赤茶けて腐っていく。田村が見た塊は九つ。そのうち八つは、田村からはずっと遠く、空の青とはまた違った紺色の水面へと落ちていったが、一つだけ、彼の眼前へふわりと舞い込んだ。

しげんと両手を掲げて受け止めてみれば、両手でも抱えきれないほど大きく、軽かった。ほとんど腐り切っていたけれど、最後に残った緑色の部分をきらめかせ、手のひらに収まる程度の光の玉へと変わった。

田村は、知らずのうちには微笑んでいる自分に気付いた。理由はわからないが、きつと

すばらしいことが起きたにちがいない、と感じていた。

田村が顔を上げると、すでに八つの光が空の彼方へ向けて飛び立っていた。一呼吸おいて、田村も手元の光を空へと押し出した。

見上げる空に光が流れていく。追いかけるか、と田村が思った瞬間、少しだけ体が軽くなったような気がしたが、足裏を引っ張るにちやにちやした下層市街の地面の感触を思い出してしまい、それきり、光を見失ってしまった。

\*  
\*

気がつけば、田村の視界いっぱいにはシグナルロストの文字が踊っていた。

一つ息を吐き、ヘルメットを取る。事務所内をぐるりと見回し、血まみれのデスクに突っ伏している一人の部下の姿を認めた。田村よりも一回り年上の社員で、四年前からこの仕事についている。今までの無理が祟ったのだろう。

「ずまな……いっ！」

手近な部下に、医者の手配を頼もうとしたが、うまく発音が出来ない。胸元に目を落とせば、自分の鼻から下が真っ赤に染まっていた。

鼻の穴に猛烈な違和感を覚え、何かがかぼれる感覚に慌てて手を差し出せば、湿った

咳とともに赤黒い塊が手の中に落ちてくる。  
ぐらり、と世界が揺れて、

\*  
\*

田村が目覚めたのは、それから二日後のことだった。

薄汚れた病室に並ぶ八つのベッドは、どれも生気を感じさせない顔が、似たような体勢で転がっている。

靄がかかったままの頭をぼんやり回し始めたところで、田村は自分を見下ろす視線に気づく。

大柄な男だ。この時代に珍しく、整えられた短髪と、ぴりつと糊のきいたグレーのスーツを着こなしている。

田村は直感的に、ああ、上層のやつだな、と感じた。だからこそ、男が差し出してき

た名刺に、少し離れた下層の街にある警察署の名前があったことに驚いた。

「ネオフウト署、刑事一課の多治見と申します。VRゲーム『ユグドラシル』の管理運営主任、田村さんですね。『ユグドラシル』プレイヤーが複数名死亡した件について、お話を伺いたい。お時間、かまいませんか」

多治見と名乗った男の声は低くよく通り、どこか聞き慣れたもののような感じがした。

田村は、多治見に感じる懐かしさの理由を記憶の中に探しながら、体を起こし、喉の奥に張り付く乾いた血を、咳で押し出した。皺だらけのシャツの袖で口元をぬぐって、そこではじめて、『ユグドラシル』のプレイヤーに死者が出た、という言葉の意味にたどりついて、顔を青ざめさせた。多治見を見上げる。田村を責めるような視線は、今のところ感じない。

「病院の先生からは、外出に問題はないと言われました。場所を変えましょう、ご同行願えますか」

多治見の硬い言葉に、田村は頷くことしかできなかった。促されるままベッドから降りて、死体安置所を思わせる病室を後にした。

「……そして、倒れた部下を介抱する医者を手配しようとしたところ、急に目がくらんで立っていられなくなりました。次に気がついたら病室でした」

自分の覚えている限りを、震える声で話し終え、田村はスクロース・タブレットを二つ口に放り込み、ぬるくなつた水を啣った。責任感を仮面として必死に記憶を浚い、見たもの聞いたものをひととおり吐き出し切った。背中と脇を冷たい汗が伝っている。見がりと、音を立てて頭に爪を立てた。田村の頭皮からむりやり剥がされて落ちた白い皮膚片が、茶色く変色した半透明なテーブルカバーにばらばらと降った。

田村の向かいに座る多治見がメモ帳にながしかを書き付け、表情をびくりとも動かさずに灰色のコーヒーを一口すすり、息をつく。

「あなたが気を失うまでのことについて、よくわかりました。ここからは田村さんの主観で結構です、他に気がついたことや気になったことはありませんでしたか？」

多治見の視線が手元から外れ、田村を見た。視線はひとところに留まらず、顔色が良くない。これ以上突いても負担になるだけか、と判断した多治見は、ぱたりと音を立てて黒いメモ帳を閉じた。

多治見が口を開こうとしたとき、頭を掻き回していた田村がおずおずと目をあげる。



怯えた目だ。

「あの、刑事さん。本当に、亡くなった人の名前は、その、鈴木さん、といわれるんですか。鈴木悟、さんですか」

「……お知り合いですか？」

田村の目が暗く落ち、なかなか出てこない言葉を口の中で転がした。ややあつて、「友達、なんです。『ユグドラシル』で昔よく遊んでいた」

多治見の顔色がさつと変わったが、うつむいたまま話を続ける田村は気づかない。

「10年くらい前に『ユグドラシル』のゲーム内で知り合つて、気が合いました。刑事さんには分からないかもしれないですけど、ギルド、ええと、チームみたいなものを作つて、かなり大きな、有名なギルドだったんですよ。何度リアルで会つたこともあります。うん、そうだ、楽しかつたんです」

「でも、五年前、『ユグドラシル』の運営チームに異動になつて、プレイヤーとして遊ぶことができなくなつて、それきり疎遠になつてしまいました。『ユグドラシル』の最終日くらい会えないか、と何度かメールももらいました、でも私は返事をしなかつた。仕方がないじゃないですか、こつちは仕事でやつて、管理権限も持つてるんだから。一般のユーザーとは、たとえばプライベートでも一緒に遊んだりはできませんよ」

「あのギルド、方々から恨み買つてたから、メンバーの一人が運営やつてるなんてどこか

から漏れでもしたら、きつとめちやくちやに叩かれる。俺、それだけは嫌だったんです。大好きなギルドの仲間たちや、大恩ある彼がいわれのないことで悪し様に書かれるようなことだけはしたくありませんでした。でも、やっぱり気になって、最終日、あの日だけは、管理モードでちらちら見てたりはしました」

「モモンガさん、あ、いえ鈴木さんのことですけど。あの人は夕方にログインしてからゲームが終わるまで、ずっとギルド拠点、……なんて言うのかな、ゲーム内での俺たちの家みたいところにいました。きつと、仲間が来るのを、待ってたんだと思います。あの人、律儀な人だったから」

「最後に鈴木さんのデータを確認したのは11時くらいでしたけど、その時もおかしな数値はなかったと思います。あつたら強制的にでもログアウトさせますから。だから、鈴木さ、モモンガさんが死ぬとか、わっかんなくて、なんで……」

田村がコップに手を伸ばし、口元まで持つて行ったところで、中身がもうないことに気がついた。水も無料ではない。粘り気を帯びた口の中で、滑りを取り戻そうと舌をくぐるくる回した。

ふと多治見を見ると、眼前の刑事もまた、襲いかかる耐えがたいものに、唇を噛み締めているように見えた。力を込めて寄せられた眉間の皺をもみほぐし、ゆつくりと口を

開く。

「田村さん、あなたの後悔は、よく、よく、わかります」

「あの人は、『モモンガ』さんは、私が引退する時に言ってくれました。いつかまた遊びに来て欲しい、『ナザリック』はいつまでもここに、と。残念ながら、彼とはそれきりになってしまいました」

多治見の言葉に、田村は目を剥いた。なぜ、その名前を。

「田村さん、刑事としてではなく、もう一度自己紹介をさせてください。私は『アインズ・ウール・ゴウン』の『たちち・みー』と申します。モモンガさんへの不義理の手前、恥知らずと罵られても構いません。ですが、私は彼の死の真相を明らかにしなければならぬ、それが、今の私が彼にできる唯一の手向けだと、そう信じています」

多治見が言葉を切り、田村と真正面から視線を合わせる。田村は喉の奥から絞り出すようなうめき声とともに、こらえきれず涙を一筋こぼした。

『タブラ・スマラグデйна』です。お久しぶりです、はじめまして、たちちさん」

恐る恐る差し出された田村の細い手を、多治見の両手がしっかりと握り返した。多治見の手の中で、田村の小刻みな震えはゆっくりと収まっていき、そして止まった。その瞳に、もう迷いはなかった。

「俺に、何かお手伝いできることはありませんか？」

## 多治見警部補の事件簿

ネオフウトシテイ、ネオフウト警察署。

かつては美しい風の通る町と呼ばれたこの土地も、前世紀からの環境破壊の波に飲まれ今は見る影もなく、重苦しい光化学スモッグに小さなうねりを与えることで精一杯の風しか吹かない。

町のシンボルたるカゼ・グルマもその姿をなくして久しく、ネオフウト警察署の正面に据えられた、赤錆びたエンブレムにその影をようやく見つけることができる。一世紀以上前の警察署長が市井の友人と作ったエンブレム、と伝えられるそれは、目のついたカゼ・グルマの後ろに、WとAのアルファベットが配されている。これについては、21世紀末に起きた国家の解体と、それに伴う警察機構の再編による混乱で資料が散逸してしまっており、当時の住民や警察署長が何を思っただったのか、全くの謎となっていた。

交通安全、家内安全、と狂ったように繰り返す受付のスピーカーに迎えられ、警察署正面の階段を三階に上がると、わかりやすく左右に分かれてドアが設置されている。

それぞれ刑事一課、二課と仰々しい看板を掲げ、日夜問わず人の出入りは絶えない。

しかし、刑事の習性というのか、一課キョウコウと二課ニタイはお互いに反目しあつており、よほどのことがなければ一課の職員は二課へ入ろうともしないし、その逆も然り、であつた。

刑事一課のドアが内側から開き、よく鍛えられた体を窮屈そうにスーツで包んだ三十路の男、多治見俊介が顔を出した。清潔に刈り揃えられた黒髪は、美青年といつていい涼やかな眉目と、少しえらの張つた力強さの漂う顎とのバランスを見事に取り持ち、一人の好漢の姿を作り上げている。

多治見は右手に書類の束を持ち、開いた左手で臆すことなく眼前の刑事二課のドアノブを握つた。

ドアを開け中を覗き込むと、目があつた二課の若い吊り目の刑事が、慌てた様子で多治見の元へ駆けつけ、要件を聞く。その口調は硬く、戸惑いを隠しきれていなかった。

多治見は若い刑事の頭を飛び越して、室内のとあるデスクで神経質そうな目を書類に落とす男を視野に入れながら、「浦部」と声をかけた。肩越しに用件を通された若い刑事は、丁稚の面目を潰されたと洩面を作る。多治見は、身長差からくる圧力を滲ませながら若い刑事に視線を落とし、「に、相談したいことがあつてね。繋いでもらえるかな」と、なんでもないことのようにいつた。

少しして、二課のドアから細身で小柄な男が姿を現した。ぴくぴくと揺れる薄い眉が、男の機嫌がよろしくないことを雄弁に語っている。

気負わない様子で掲げられた多治見の左手には目もくれず口を開く。

「一課が何の用だ」

「ああ、少し時間をとってもらえるかな、少しばかり込み入った話なんだ」

浦部はふん、と鼻を鳴らして、「なんでもいいが、若いのの顔を潰すのはやめろ、西野のやつ、あれでまた暫くからかわれる」と吐き捨てた。

「彼は好かないんだ、刑事の立場で小遣い稼ぎをにしても、やり方というものがあるだろ」

「否定はしない。が、使いどころがある。つまらん感情で計算を狂わされるとかなわん。重ねて言うが、不要な波風をたてるな。」

で、相談というのはなんだ？　ここしばらく管轄内のシンジケート連中は静かにしているはずだが」

「さすがだな、着任からこの短時間で、もう連中の動向を把握できてるのか」

「ふん、あんな連中は悪ではない。ただの事業家だよ、躍らせようはいくらでもあるさ。」

……よこせ」

言うが早い、男は多治見の右手から書類の束をむしり取る。

100枚程度の書類を一分もかからず読み終え、鋭い視線を多治見に投げた。

「八番調べ室が空いてる、来い」

「話が早くて助かるよ、浦部」

「浦部警部、だ。間違えるなよ、多治見警部補」

二十代半ばと、やや遅まきながら警察官の道を志しながら、その才覚を十全に発揮し七年目にして異例の速さで警部まで昇進した男、浦部孝は、己の階級に強いアクセントをつけ、多治見に冷やややかな笑みを向けていた。

\*\*\*

「さて、まずは認識のすり合わせと行きたいが」

パイプ椅子にどかりと腰を下ろし、長い足を窮屈そうに組んで、卓上に広げた書類を指差して浦部がいう。典型的な下層市街であるネオフウトシティを歩くには不釣り合いなほど磨きこまれた革靴が、天井のシーリングライトに照らされて輝いていた。

「このホトケⅡサン、鈴木悟というのは、モモンガのことで間違いないんだな」

「ああ。仕事に出てこないので会社から依頼が来た。うちの若いのが確認に向かったところ、自宅内で亡くなっていたらしい。VRメットを被った状態で、『ユグドラシル』が起動したままだったそうだ。」

IDを照合してアバターを特定、死亡推定前のバイタルデータも追いかけたが、目

立った変調なし、だ」

「死因は、心停止、か」

書類から上げられた浦部の視線は、多治見の葛藤を深いところまで見通す光をたたえていた。

国家という枠組みが解体され、企業がすべてを牛耳るこの22世紀の世界では、刑事であつても有力な企業の意向を無視することはできない。どこかの企業にとつて不利益となる死、これを隠蔽する必要があるとき、死因についての報告書は「心停止」とのみ記載されるのだ。

祖父、父親ともに警察官の家に生まれ、きらきらした正義感を胸に警察官を志した多治見は、この抗いきれない現実をひとまずでも受け入れるのに10年かかった。上司に噛みつき、反抗し、書いた始末書は数知れず。

組織に抗うことに疲れ、無気力に沈んでいた何年かを経て少し大人になり、周囲との折り合いのつけ方を身につけ、悪く言えば諦めと向き合つて刑事課へ戻れば、もともと高い能力もあつてとんとんと昇進していったのが今の多治見だ。今になって「心停止」の事件について掘り返そうという考えは、多治見本人にもなかった。しかしそれは、二日前に部下が回してきた検死の報告書を目にするまでは、の話であつた。

浦部は知っている。かつて刑事課を追い出され、閑職に回された多治見はVRゲーム



『ユグドラシル』へ逃げた。

現実世界ではなし得ない「正義」という言葉にこだわり、虐げられるプレイヤーらを救済しようとクランを立ち上げ、気のおけない友人を得て、心を慰めながらゆつくり現実と向き合い、刑事課へと返り咲くことができた。いわば、『ユグドラシル』で知り合った40人の仲間は、多治見にとつて友人であるとともに恩人なのだ。

死ぬまで口にするつもりはないが、世をひねて燻っていた浦部に刑事という天職への道を示してくれたのは多治見であり、その意味で浦部は多治見に大きな恩を感じている。であるからこそ、悩み深い多治見の泣き言にも等しい相談に、皮肉交じりとはいえない根気よく付き合ったり、部署を超えて知恵を貸したりもしているのだ。

だからこそ、浦部は多治見が持ち込んだ報告書に不吉な予感を覚えていた。

浦部もまた『ユグドラシル』の世界で、モモンガこと鈴木悟に世話になった身だ。そんな鈴木が「心停止」で処理されてしまうことに、心のざわめきを覚えなほ冷血漢ではない。

しかし、『ユグドラシル』は少しまずい、と浦部の冷静な部分が告げている。運営会社は国家企業というほどの勢力ではないものの、ネオサワメシテイが再編される前から地元根付く大会社で、独自に編成する警備部隊の練度や装備の水準も相当に高く、シンジケートに出回る噂ではソウカイヤの刺客を撃退した実績すらあると聞く。

そこに捜査のメスを入れることが果たして可能なのか、多治見はどこまで追求するつもりなのか。もみ消しや部内の処分程度で済むならやりようはいくらでもあるが、向こうが排除を考えてくる可能性は、その場合の対応策は、取引のある大会社でコネの使えそうなどころは、……。

「すまない、浦部」

浦部が考え込んだのはほんの数秒であつたが、多治見はそれを的確に読み取つたかのように言葉をかけて思考を中断させる。

「何がだ」

「いや、言っておきたかっただけさ。それと、考えを深める前に、もう一つ目を通して欲しい資料がある」

多治見は、懐から取り出した掌サイズのメモ帳を浦部へ渡した。この時代の電子機器は、無線ネットワークを通して必ずどこかへ接続されているため、あまり見られたくない資料については100年前と変わらず手書きで作成する、という不文律があつた。浦部は渡されたメモを、少し時間をかけて紐解く。右手の人差し指が、浦部の意思と関係なく鼻の下をこすり始めた。

『ユグドラシル』プレイログの、しかも通信量の抜粋かこれ？

お前どこからこんな

データを」

「情報元は後だ。その数値、気にならないか」

「確かに妙だな、VRゲームのトラフィックがでかいのは当然のことだが、それにしたって日付変更直前の時間帯が異常だ。……これが原因で肉体側の神経系がオーバーロードを起こしたと?」

「わからない。モモンガさん、いや鈴木さんの遺体は解剖なしで火葬場へ直行だったそうだ」

「そこもおかしい。いくらなんでも手回しが早すぎる」

「ああ。それと、あちらさんの渉外担当への話の通りが不自然にスムーズだったことと、……たまたま会社の外で他の署の刑事と出くわしてな、よそでも同じような事件が複数あつたらしい」

『ユグドラシル』の最終日に、プレイ中に亡くなったと思われるホトケケサンが複数、しかも会社はそれを把握している可能性が高い、ってことか」

お互いが思考に沈み、わずかな沈黙が訪れた。多治見が長く息を吐いて、  
「手元の資料だけじゃ事件か事故かも断定できない。こんなとき、警察の横の繋がりがほとんどないこの時代が恨めしい」

「なんだ、また前世紀のテレビジョン・ドラマの話か? あんなもんは企業より力のあ

る普遍的な社会の枠組みがあつてのものだろう、昔語にすぎんよ」浦部は鼻で小さく笑

い、肩をすくめた。

「それよりだ、多治見警部補。お前、先方の社内に協力者でもいたのか」

「そうだ、後まわしにしたきりだったな、すまない。実は昨日、『ユグドラシル』運営チームのリーダーから話が聞けたんだ」

「それが知り合いか何かだったのか」

「ああ、驚いたよ」

そういつて多治見は視線を左右に振る。聞かれたくないことか、と察した浦部が、多治見の背後、調室の出入り口をちらりと見て、聞き耳を立てている気配のないことを確認し、目で続きを促した。

「タブラさんだったよ、覚えてるだろ、『アインズ・ウール・ゴウン』の、タブラ・スマラグディナ。亡くなった鈴木さんとも面識があったらしい。ずいぶん狼狽えてた」

「タブラ？　また懐かしい名前だな、あいつ運営なんてやってたのか」

「本名は田村さんというらしい。で、日付が変わる一時間くらい前からはゲームの通信量のはね上がり、運営チームでもオーバーロードで倒れた人間が田村さんともう一人いたそうだ」

「運営チームにも被害者が二人、か。そつちはもともと莫大なデータを脳内に流すんだ、業務上の事故と考えても理解できるが、……いや待て」

考えを巡らせていた浦部が、ふっと眉を上げる。

「よその管轄でも複数名死者が出たとか言っていたが、お前の把握しているだけでいい、この件でユーザーは何人死んでる？」

「そうだな、ネオサワメで二人、さらに又聞きだが隣のネオクルマでも二人、うちの管轄で鈴木さんを入れて、最低でも五人……なるほど」

浦部の問いかけに、多治見も彼の言わんとするところを察した。

隣接する町だけで最低五人も死んでいるのなら、関東圏のみに絞っても相当数の死者が出ている可能性がある。被害者ら全てに鈴木悟のケース同様、プレイヤーを死に至らしめるほどのデータ送信量の増大があったとしたら、そのデータの行き先である運営チームの人的、物的被害はもっと甚大であるはずだ。しかし実際には、運営チームには死者の一人も出ておらず、機材の破損等もなかったという。

つまり、死亡したユーザーが送信したデータは、『ユグドラシル』のサーバーまで届いていないのではないか、という仮説が立つ。

「ユーザーとサーバーとの間に何かが挟まっているかもしれないな、当たるとしたらゲーム会社ではなくプロバイダだ、そっちならいくつかアテがある」

不敵な笑みを浮かべながら捜査方針を練る浦部は、ふと向かいに座る多治見の浮かべた笑みを見とがめ、眉根を寄せた。

「何がおかしい」

「いや、自分の見通しの甘きにな。最初にこれを見せるとき、捜査を止められるかな、と心配していたんだ。だが、いざ蓋を開けてみればしばらく見ていなかっただけだ。浦部の本気だ」

多治見がじつと自分の右手を見ていることに気づき、浦部は右手を口元から離す。浦部は、状況から真実を推測する能力においてそうそう負けるつもりはないが、人間観察の面ではまだ多治見に及ばないことを認めている。

「ふん、はじめから乗せるつもりだったんだろうに。白々しい」

負け惜しみにしかならない言葉だったが、いわずにはいられなかつた。多治見の笑みが深くなる。いやらしさのない、意志の強い瞳が細められた瞼のうちに輝いていた。

「浦部、これは私の勘だが、今回の件、事故と事件の両面があるように思う。企業に喧嘩を売るつもりはないが」多治見が言葉を切る。一拍置いて、「だが、何者かが鈴木さん、『俺達』のギルドマスターを狙った、あるいは巻き込んだというのなら、私は真実を白日のもとにさらし、彼の無念を晴らしたい」

多治見は浦部をまっすぐ見つめていった。浦部はわざとらしく舌打ちし、「それが喧嘩を売りかねないってんだよ」と吐き捨てた。

「俺だってモモンガには世話になったんだ、この件については全面的に協力してやる。」

だがな、デリケートな捜査になるのは必至なんだ、表立って動くのは控えろよ、多少な  
ら手を回してやれるから、必要なら俺を通せ」

「わかった、頼りにしている。……私はもう少し関係者を当たる。田村さんをクツシヨ  
ンにすればもうしばらくは大丈夫だろう。通信データの関係は、伝手があるなら頼める  
か」

「やっておく、そちらも何か判明すれば共有しろよ」ひらひらと浦部が手を振って、「そ  
ちらの話はわからなくてもない、が」

浦部が、指の隙間から多治見の背後にあるドアを一瞬見て、語調を強める。手にあつ  
たファイルを机に叩きつけ、蛇のそれを思わせる切れ長の目が多治見を射抜いた。

「そんな与太話を、しかも一課キョウコウの下働きだと？　ふざけるのもいい加減にもらいた  
いなア、多治見警部補？」

確かに君は私の先輩にあたる、世話になったと感じていることも嘘ではないさ、だか  
らここまで礼を尽くした、聞いてやった。

だがここまでだ、君は二課ソクタイの警部職に、生意気にも要請できる立場では決していない。  
私は何か間違っているかね、刑事一課強行犯第一係、多治見班長殿？」

言いながら、浦部の左手は散乱したコピー用紙の隅に、こつそりと何がしかを書きつ  
けている。

多治見は浦部の目に視線を返し、ぐつと強く拳を固めてみせた。右肩にも少し力を入れ、要望の通らなかつた悔しさを背中に示す。何も言わず立ち上がり、書類を手早くまとめた。小声で、「そのときは私が出そう、キャツシユは不要だ」とだけいつて踵を返し、デスクに足を乗せた浦部の軽蔑したふうな視線を背に感じながら、少し待つてからドアノブへ手を伸ばした。外には誰の姿もなかつたが、遠ざかる足音の残響が多治見の鼓膜をくすぐつた。

「粗末な張り込みだ、要らん節介だろうが、彼は使えそうに思えない。二課の仕事に出せば彼は死ぬぞ」

「そうだろうな、きつとそうなるだろう。悲惨な末路だろうな、心が痛むよ」

嫌悪感を交えながら、しかし若者の行く末を案じる多治見の言葉に、浦部は指で前髪をくるくる巻きながら、「それがアレの選んだ道だった、それだけのことだろう」平然と返す。

多治見の背中が、道端で腐つて膨らんだまま放置されるゴミ袋のように、その裡から溢れ出ようとするどろどろしたものを、巨人の手のひらを思わせる膂力でもつて無理矢理に抑え込んだように見えた。

ドア越しの西野に見せた多治見の演技もまだまだだな、と、浦部は他人事のように思った。ひとたび溢れば血の雨が降るまで止まらない、そんな激情が眼前で渦巻くの



を見ながら、それでも友人の自制心を、諦めの深さと言い換えてもいいそれを浦部は知っていたし、信用していた。

「君は、本当に、性格が、わるいな」

錆びついた鉄塊が擦れあうような口調で紡がれた言葉に、浦部は何も言い返さなかった。

革靴のソール程度のクッションでは、床に叩きつけられる多治見の踵を受け止めきることは出来なかった。ごつごつと鈍い音を立てて歩み去る多治見を見送って、浦部は黄ばんだ、埃と煙、その他人体に有害なものがふんだんにこびりついた取調室の天井を見上げる。

「俺を誰だと思っている、『聖騎士』サマとは水と油の、『大悪魔』やってたんだぜ」

『ユグドラシル』にログインしていた頃のように、浦部の指先が宙を踊る。彼が『ウルベルト・アレイン・オードル』として、その身に染みつくほど繰り返した超級魔法のコマンドだったが、それはまるで、いにしえの大魔法使いが魔法陣を描くがごとくに迷いなく、数多の人間の悔恨が染み込んだ、くすんだ色合いの取調室にはとても不釣り合いな優雅さが秘められていた。